

第3回巡回自主上映の報告と感想

渡辺謙一

2023年11月

あれから4ヶ月、やや遅きに失する感はありますが、7月1日弘前市から16日三鷹市までの上映会を振り返って、今後の活動の指針にしたいと思います。

- 今年も北から南下する日程となりスタートは弘前市でした。核燃料サイクル施設の違法を1986年から告発裁判を続ける「核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団」が主催を引き受けてくれました。青森県内で連続上映することに意義をみて、弘前、青森、八戸、そしてむつ市でも可能性を探っていただき、最終的に弘前市市民会館で、「我が友・原子力」、青森市アウガで、「核の大地」、八戸市福祉会館で、「我が友・原子力」を上映しました。迎えに出てくださった佐原さん、事前準備を組織しこの日に備えてくださった伊藤さん、三笠さんほか多くの方々、青森県の第一回巡回上映から常に積極的にバックアップしてくださる遠藤さん、原告団の代表・浅石ご夫妻、事務局の山田さん、裏方で動いていただいた多くの方に改めて感謝いたします。
- 私が青森県を初めて訪れたのは、2014年、春と秋。「核の大地」（2015年独仏で放送）を制作するためでした。六ヶ所村に再処理施設が置かれる経緯、村議会の動きと住民意識の変化などを調べて行くうち情報源の柱になったのは、訴訟原告団メンバーからの聞き取りでしたので9年ぶりに皆さんと再会できかつ協働できたのは何よりでした。



- 訴訟団が37年も裁判を継続しなければならないのは、下北半島の核関連施設が年々増殖を止めないからです。久しぶりに訪れた六ヶ所村には、「核融合エネルギー実現のための研究開発拠点」が新たに設けられています。下北半島の核施設拡大の理由と意味を認知している人は少ないと思います。60年代に石油備蓄基地計画、70年代はオイル危機で開発中断、80年代に核燃サイクル基地計画、90年代再処理工場建設と、青森県は国策に翻弄され、政治的選択肢を奪われてきました。訴訟団の存在と訴えは、<https://1mangenkoku.org/> 核施設との共存はできないという核文明に対する闘いであり人類共通のコトバになっています。

- 映画を見てもらって話すのだから対話は開けるだろうと思うのは、安易な考えでした。みなさん映画を見て話も聞ける、あるいは考えるきっかけを得ようと期待してくる方が多いのです。トークに参加して尚かつ自分も発言しようとやってくる方は少ない。けだし当然です。3カ所目の八戸市会場の

の休憩時間に、弘前市、青森市で回収したアンケートを読ませていただくと、質疑応答のイメージが湧き、トークをしやすくなったと感じました。僕から皆さんへの設問を用意するか、あるいは上映後の休憩時間に質問用紙への記入をお願いし、回収し、目を通してからトークを始めるか。次の機会には工夫したいと思います。とはいえトーク時間は淀むことなく進行了ました。

- 「核の大地」は、再処理・核燃料サイクルの危険を放射線、廃棄物処理の観点から実証しています。再処理を初めてシステム化したアメリカの目的は、プルトニウムを取り出し原子爆弾を製造するため。1周回遅れで再処理をシステム化したフランスは、軍事ではなく核燃料をリサイクルするとい

うイメージを作り上げて西側諸国の核燃料の需要を喚起し莫大な営業利益を産むためでした。2周回遅れの日本はフランスからプラント輸入で六ヶ所村再処理工場を建造しましたが、その理由はなぜでしょう。当初の公式な理由も、その後のこじつけも、この36年の間に世界の原子力地図は大きく変わり、正当な理由が見いだせなくなっているのです。幸い未だ稼働できない状況にあり、稼働して得られるメリットよりデメリットの方がどれだけ大きかを可視化していく運動の持続は、日本という国のために必要です。国策であり、失策であり、国難が待ち受けているからです。今後も映画上映を通じ青森県の方々と対話を開くとともに、再処理は青森県だけが抱える問題ではないことを各地に発信する努力を続けていきたいと思います。

- 青森市では遠藤さんのお膳立てで懇親会、八戸市では訴訟団の浅石ご夫妻はじめ事務局の方達と午餐会、翌日は伊藤さんの運転で寺山修司記念館と六ヶ所村を再見しました。上映後のトーク時間はもちろん、上映を支えていただいた方々との懇談もまたかけがいのない時間です。ありがとうございました。上映会の基礎データとアンケートは訴訟団のインターネットサイトに掲載されています。、<https://1mangenkoku.org/>

7月5日（水）

静岡市で初めて上映会を開きました。“我が友原子力”は、焼津漁港の第五福竜丸の被曝を語り、かつ第五福竜丸以外にもおよそ200艘余のマグロ船が水爆実験のフォールアウトにさらされ高知県土佐清水、室戸の漁師の間で癌が多発し、被曝事実検証と健康被害の因果をめぐる国賠訴訟が今日なお続いていることを語っています。2020年日本での初上映は、撮影が縁となり高知県、太平洋核被災支援センターが主催になりました。今回の静岡市は、支援センターとの縁で、静岡県保険医協会が自主上映の主催を名乗り出てくれました。



- 協会として映画上映は初めての経験とのことでしたが、会場の札の辻クロスホールは小ホールながら映写状態は秀逸でした。お医者さんの集まりということで放射線治療や被ばくの話が主になるのかなと予想していましたが、上映後30分程度のトークタイムは、取材の裏話をしているとあっという間に終えてしまい、映画内容を展開し対話を開くには時間的に難がありました。みなさんが話をジッと静聴されているので冷や汗が出ました。上映会後の懇親会での雑談は大変賑やかでこちらの方がむしろ印象に刻まれています。

- 懇親会の翌日、出席された方から改めて映画の印象をメールでいただきました。引用します。 /// 「我が友原子力」、実に簡潔かつ明快に原子力に関する現代史の断面を描いたドキュメンタリーの表現に改めて、原子力の怖さを伝えてくださった思

いがいたします。まさに「核二元論」の統合の視点から原子力問題をとらえ返す必要がよく分かる気がいたしました。それにしてもこれほどの番組がヨーロッパで広く伝わるメディアの在り方と、福島事故以後とりわけ忖度機関に堕した感のする日本のメディアの状況を思い起こすべきだと感じます。福島の人々のリアルな現状と、ビキニ、チェルノブイリ、そしてトモダチ作戦の米兵という連関も興味深く思います。来年は奇しくもビキニ事件70周年に当たります。第五福竜丸の母港を持つ静岡でも何らかの取り組みをと考えたいと思います。その節はまたどうぞよろしくお願いいたします。///

- 1950年代、水爆実験時にマーシャル海域でマグロ漁に出ていた漁師さんは今日年齢が85歳を超える人々です。この映画の中で証言しているお二人がもはや癌で亡くなっています。老体を押して裁判に訴え、反核の声を上げ続けるのは、自らの健康を害しているからでなく、癌を患った仲間の死をあまりにもたくさん見てきたからです。仲間への無念の思いです。水爆実験の放射性下降物質に晒されのちに癌を発症し亡くなった漁師さんたち一人一人の肖像を描くことは70年後であろうと意味を持ちます。昨今は核融合炉こそエネルギーシフトに応える未来のテクノロジーなどと謳うプロパガンダが始まっているからこそです。

7月9日（日）

島根県松江市は去年に続き二度目の巡回上映です。中国山地を縫って走る伯備線に乗るのを楽しみに指定席券を求めて駅に行くと、本日は全面運休と。大雨洪水警報中で明日も天候回復の見込みなしと。では松江行きのバスに切り替えようもこちらは本日分全便満席とな。さて、タクシーで150km乗ると料金はいくらかなどあれこれ想を巡らし、まず前日入りを諦め、ネットで明朝のバスの予約を探すと運よくわずかに席が残っていました。明日は”核の大地”の上映が、10時、13時30と2回です。最悪11時30までに会場の松江市民活動センターに入れば良い。はたして翌朝も岡山は雨、バスの運行がキャンセルとならないことを祈りつつ駅へ行くとバスは予定通り出発しました。ところが中国山地に入ると雨足は激しくなり果たして松江まで行けるのだろうか？時間を気にしながらなんとか松江駅に着くと11時を回っていました。お迎えの方の車で会場に入ると上映は終り、主催者の一人、芦原さんが間をつないでくださっていた。芦原さんは「島根原発3号機訴訟の会」を立ち上げ、<https://sayonara.daynight.jp/shimanegenpatsu/3goro/> 2013年以来3号機の安全性を問い、稼働させないための訴訟を続けている。一年前コロナ危機の最中に”我が友原子力”の上映を敢行、夏のうだる暑さの中、島根原発、出雲大社や古墳群、古跡を案内していただきました。今年はうって変わり大雨と洪水警報の中、熱心にお集まりの方々、準備を整えてくださった裏方のみなさんに感謝です。苦労してやってきた甲斐がありました。松江の主催は：「核の大地—プルトニウム物語」上映実行委員会（島根原発3号機訴訟の会、人権パッチギ松江）

- ”核の大地”を午前午後、2回の上映。トークは息を切らして駆けつけた格好になり、事前に予告したパワーポイントを使った講演形式はやめて、思いつくままアドリブになりました。青森から巡回して来たとし、六ヶ所村も再見してきたので、島根原発と青森の状況を関連付けるような話にはできないものかと思いつつ。

- この映画は、日米仏の核開発の経緯と、使用済み燃料再処理の目的と仕組み、運用に伴う膨大な放射性核廃棄物と環境、人体への害、これら複数のテーマを3国を行き来しながら表現するため、やや込み入った構成になっています。下北半島の核施設が思惑通り機能し始める時、近未来にやってくる核廃棄物公害も警告しています。日本の原子力システムが、使用済み燃料を再処理して取り出したプルトニウムを混合燃料（MOX）として再利用する方針を維持する限り、六ヶ所再処理施設と各地の原子力発電所の関係は、ニワトリが先か卵が先かの関係に抽象化されリアルな問題（公害）から目を逸す効果をもつのです。つまり、原発再稼働差し止め訴訟と核燃料サイクル阻止訴訟とは、表裏一体関係にあり、下北半島の進捗を知ることはその意味でとても大切なことです。”核の大地”という映画をきっかけに、下北半島に注意を喚起できればよいと常々思います。

- 去年レンタカーの後部座席に芦原さんに乗っていただき、島根原発3号機の立地周辺を散策しました。島根原発への道のりは、平野部の水田、古代古墳文化に思いを馳せさせる風景と、幾多の里山を走り抜け日本海に出るとそこには小さな漁村があり、漁村から先は緑深い丘陵とリアス海岸の入江が続く。その入江の一つに人目を避けるように築いた要塞が島根原発3号機です。日本という国の紛れ



もない資産である山々と海、自然と水を破壊する営みが絵巻になって眼前に広がるように見えるのです。

ー 今年、人権パッチギ松江 (<http://pattigi.blog.jp/>) の森さんから上映会後に、松江城下の堀川を船で遊覧するお誘いがあり楽しみにしていました。松江は宍道湖と中海を結ぶ河川とその水を引き入れる堀割りが街を形作る水の城下町です。そのためかすっきりとして風通しの良い街並みが松江をユニークにしています。しかし大雨のため水上からの眺めはあきらめ、代わりに議論沸騰の懇親会となりました。松江には確か統一教会の裏事情を書いている方がいたなとうっすら記憶していたので聞こうと思いつつも、戦後史会議・松江の代表の方などを交え、政治談義と歴史認識で盛り上がり聞きそびれてしまいました。数日後、森さんから届いたメールには、次回はぜひ”天皇と軍隊”を上映したいと、はや来年の話となる嬉しい提案でした。

7月13日 (木)

ドキュメンタリー映画上映会

ヒロシマの黒い太陽

フランス、ベルギー、スイス、日本・国際共同制作 2011年10月放送 90分

「原爆投下は日本を早期降伏に持ち込み、戦争を終結させ、犠牲者拡大を防ぐためにやむを得なかった」
この正当化の陰に戦後の東西冷戦を見据えたアメリカの思惑があったということは、これまで語られてきた。

しかし、この軍事・政治的な力学に加えて、産業界、そして科学者たちも、それぞれの欲望と思惑が絡み「原爆投下」へと向かう力が働いていた。さらに、国際政治の枠組みの中で、アメリカ・イギリスばかりでなく、ヨーロッパ諸国も「原爆投下」に向かって動いていたのである。

「落とす必要のなかった原爆がなぜ落とされたのか」
原爆投下から65年を経て明らかになった関係者の日誌や書簡などから、「原爆投下」に向かって動いた西側諸国の産・官・学一体の構図を明らかにし、戦後いまだ続く「核の時代」が、如何にしてかたち作られたのかを追う。

2023年7月13日 (木)
13:30～16:30 (13:00開場)
三春町まほろ小ホール
資料代 900円

プログラム

13:30 開会

13:40～上映開始 (90分)

15:10 休場

15:20 渡辺謙一監督のお話

16:30 終了

主催：渡辺謙一監督の映画を観る会
協力：三春モニタリングポストの会
資料提供及び協賛 KAMI Productions
お問合せ nakakowadotomail.co.jp (和田)
(※を厳に覚えて下さい)

渡辺謙一監督

1997年パリに移住。フランスや欧州のテレビ向けドキュメンタリーを制作。『核前線』で2005年アンコール・ブルジョア映画祭芸術作品賞受賞。『天皇と軍隊』(2009)、『ヒロシマの黒い太陽』(2011)、『フクシマ後の世界』(2011)、『核の大地・グレート・ワイルド』(2015)、『国家主義の誘惑』(2018)、『致知堂・フクシマの戦時下の歴史』で日本ウラン映画祭2022最優秀ドキュメンタリー賞受賞。

福島県の上映会は、第1回巡回上映からお世話になっている武藤さんの地元三春町でした。第1回巡回上映・福島市・フォーラム福島、第2回巡回上映・郡山市・教職員組合会館、常に武藤さんにリーダーシップをとっていただき、たくさんの方々にも裏で動いていただきました。ありがとうございました。今回の会場は、三春町まほろ小ホール、主催は、渡辺謙一監督の映画を観る会・三春モニタリングポストの会です。過去2回の巡回上映で、“核の大地”、“我が友原子力”二作品はじっくり見ていただき議論もできたので、“ヒロシマの黒い太陽”(90')を僕の方から提案しました。フランステレビジョンが基幹局になりNHKも国際共同制作で参加したこの作品は、アーカイブ(資料映像)の権利期間10年を超えたため放送も、商業上映もできませんが、制作会社の了解を得て作家自身が所有する作品を、本人が研究会名義で上映することはできるという判断のもとに上映しました。福島県でこの作品を上映したいと思ったのは、この仕事の撮影のため東京に到着した日が、2011年

3月10日だったといういわく付きの仕事で、3.11以降リアルな放射能の恐怖を個人的に体験した影響は作品作りに反映しているので、福島の方たちにもぜひ見ていただきたかったのです。

ー 上映後、武藤さんが、“ハラハラドキドキしながら90分間目が離せませんでした。”とおっしゃるので嬉しかった。上映後トークでは、原子力が、戦争のための武器開発から副産物として生まれ、それはどのような経緯でどんな人たちがどんな思想でもたらしたのか、丁寧に具体的に話すつもりで資料も配布してもらいました。が、資料に触れる以前に話は思いがけない展開になりました。ウクライナ・ロシア戦争の初期、ロシア軍がチェルノブイリとザポリージャ原発を標的にしたのはなぜか。戦争の背後には米ソの原子力システムをめぐる覇権争いがある。などとウクライナ戦争を題材に話し始めたところ参加者の中に挙手をする人がいる。二本松市に住み、福島原発事故直後から放射線衛生学の観点で放射能を計測し、住民の求めに応じ、研究領域だけでなく行動半径も広範囲に活動し続ける熱血漢、木村さんでした。彼は、チェルノブイリ原発事故後の放射能影響調査のため、キエフを起点

に調査活動は、ウクライナ・ロシア戦争直前まで、渡航80回に及んでいます。敬意を表して木村さんにマイクを振ると、ウクライナ難民を受け入れ、援助している現況などウクライナ関係をテーマにトークは広がって行くのでした。思いがけぬ展開になりましたがこれもトークを活性化の一つの形になったと思います。ロシアがチェルノブイリ、ザポリージャに侵略軍を送った背景については、<https://jp.mondediplo.com/2022/12/article1343.html> ルモンド・ディプロマティックの記事を紹介し引用し話しました。原子力システムの構築争いが、戦争の引き金になったのではないかと仮説を立てる記事です。イスラエル・ガザ紛争が再発し、増え続ける犠牲者を日ごとに眼にする私たちは今、反核反原発の意思を、反戦の意思と結ぶロジックを発想し構築するべきだなと思います。

ー 会場の向かいのレストランに懇親会の席が設けられ、上映会の準備に関わった方々との懇談になりました。みなさん例外なく原発訴訟や被害救済訴訟の原告になられています。我が友原子力で証言をいただいた武藤さん、今野さんはじめ、前回同様事前告知や会場設定にリーダーシップをとってくださった和田さん、彼女は新たに、“福島イノベーション・コースト構想を監視する会”を立ち上げ、政府系シンクタンクや研究所、その周辺に群がる新興企業、復興開発企業の動きや予算、その使い道をチェックする運動に繋がようとしています。<https://www.facebook.com/groups/634327701659823/>

郡山市に宿をとったので今野さんの車で移動、和田さん、今野さんその仲間とともに二次会の夜がふけるのでした。

ー 12年と半年が経とうとする今、これまで事故の検証や、今後の対策に費やされた多くの言説と行動、被害を受け犠牲を強いられた方々からの訴えの声、この膨大なエネルギーを自分なりに一度整理する仕事があるんじゃないかと思っています。

7月16日（日）

東京は三鷹市中央防災公園・元気創造プラザで、“日本・国家主義の誘惑”（arte共同制作、52分）。主催は自主グループ“読み解きレッスン”。三鷹市の講師派遣事業の支援も得ることができました。これらの根回しと段取り連絡にイニシアチブをとってくださった高橋さん、準備と当日の雑務をこなし懇親会までお付き合いいただいたメンバーのみなさん、ありがとうございました。

“国家主義の誘惑”は、独仏の視聴者に向けた日本の近代史を扱うTVドキュメンタリー、歴史番組です。欧米人の眼に日本の近代史を紐解くのため、欧米の歴史家の目線で日本史を語らせるとどんな日本像が描けるのか、それを日本人が観て、どう受け止めるか。興味はそんなところにもありました。

上映1時間、トーク1時間、質疑応答1時間の長丁場になりました。論旨は特に準備をせずに、参加者の皆さんの顔を見ながら映画の要所要所を掘り下げるように話す努力をしました。欧米の一角に居住しながら欧米のメディアで、ドキュメンタリーで仕事をするとき、自分が日本人であることを自覚せずに仕事は成り立ちません。核や原子力なら一定の共有認識があるものの、“歴史もの”は、欧米人の歴史認識体験を日本の政治史や社会の上になぞることになり、このズレを承知の上で共通認識の場を作る努力をすることになります。映画の中の事例をあげると、天皇の生前退位を提起した宮内庁発表の“平成天皇ビデオメッセージ”のくだりが一例です。



ー 2016年7月の全国参議院選挙で改憲勢力が3分の2以上の議席を確保するとそのひと月後の8月8日、平成天皇は退位の意思を国民に向け示したビデオを宮内庁を通して公表する。

<https://www.kunaicho.go.jp/page/okotoba/detail/12> このビデオの解釈を”天皇によるたった一人の反抗”とする欧米の歴史学者の眼。結果的に安倍政権は平成天皇の意思を汲んで生前退位を準備するための法整備、皇室典範の解釈に一年を費やし、憲法九条改正への勢いは削がれることになったのですから、欧米からの視線は当たらずといえども遠からずだった。こうした外から照らされた日本の有り様を参照しつつ国内に目を向ける作業力、すなはち教育が目立って劣化してきたのではないか。geopolitics（地政学）のセンスを養うには、どういう素材と思考を要するのか、トークと質疑応答に費やしたテーマ性はその辺りにあったと思います。私の仕事の系列は、反核反原子力テーマと日本近代化テーマを交互に仕事する結果になっていますが、明治維新以来の欧米化政策の流れに核・原子力を位置付ける作業を経ないと欧米メディアの中で主張するのは、難しい、あるいは意味がないと思っているからです。言い換えれば日本の独自性を強調し、欧米との距離を測っていると言えるかもしれません。米国の属国とみなされる外交から、独自外交の道に進み出するための初歩が自国の歴史認識と欧米との距離感の把握であることを作品作りを通じて示していきたいと思います。

トークの最後は、次回の予告をして締めくくりました。独仏公共Tv/arteと共同制作の54分番組について、簡単な内容で次回の巡回上映のラインナップにこの作品を入れる旨です。タイトルは最終的に～ 日本・彼らが見た帝国の終わり- となりましたが、簡単にいうと欧米から見る日本戦争史です。1925年にフランスから福島県富岡町に通信技師として派遣されたフランス人青年が、1947年に日本を去るまでの家族形成史が、昭和世相史と並行して語られます。昭和前期を文字通り日本人とともに時間を共有した家族の変転は、時に距離を置き（満州事変、515、226、日中戦争）交差し（インドシナ進駐）巻き込まれ（パールハーバー、軽井沢強制疎開）参加する（父子3人が占領軍GHQ雇用軍属になる）と、多面展開します。シナリオ書きに苦勞し4年もかかりましたが、甲斐あって放送局の担当者は大満足です。放送局arteとは、”日本・天皇と軍隊””日本・国家主義の誘惑”と制作して来たので、日本近代史3部作ができたわけです。編成は結局、単発ではなく日本特集を一晩組む方向になり、現在、他社の企画の仕上がりを待つ状況です。年明けにプログラムが編成される予定です。

終了後、高橋さんはじめスタッフの皆さんとの会食は、中華料理を囲み楽しく活発なテーブルになりました。ぜひ次回も新たな作品を材料に再集結できるといいなと思います。

以上簡単ですが上映会報告です。各地の運動が繋がってほしいという思いもあって書いています。これに加えておくべきは、財政経済面と次回の予定です。いずれの会場でも、カンパ、謝礼、賛同、講師料などの名目で援助金をいただきました。深く感謝いたします。第2回巡回上映から KAMI Productionsのプロデューサー、クリスティーヌが（連れ合いでもあります）同行し巡回したので経費は増え、40%相当が援助金で賄えました。では60%は持ち出しかといえばそうは考えていません。金には換えられない貴重な何かを蓄積していますから。その何かは仕事につながり大いに役立っています。今回は2024年9月後半の2週間を予定しています。その企画提案は、5月に皆さんにお送りします。新作の”日本・彼らが見た帝国の終わり”は、24年に入ってから編成、放送日が決まりますので春に日本で公開するのは難しいと判断しました。

先月決まったニュースです。台湾で”我が友・原子力”が学生たちの手で巡回上映になります。台湾は1月13日投票の総統・立法院議員選挙の真っ最中ですが、選挙に標準を合わせ11月3日から12月28日の期間に高雄、新北、嘉義、桃園、台北と5都市で、NPO・緑色公民行動聯盟Green Citizens' Action Allianceの企画として上映されます。ここに詳しいことは書きませんが、この時期に台湾で”我が友・原子力”を上映する意味はとても大きいのです。来年6月までこの巡回上映は続き、私自身も1月22日には台北市内で上映+トークを予定しています。以上 渡辺謙一 2023.11.

* この報告文は引用、転送、転載、自由にお使いください